

巻 頭 言

北海道標茶高等学校長 津嶋 拓慈

令和2年度の課題研究報告書がここに完成しました。1年間の活動の取組、報告書のまとめに関わり、ご支援とご協力をいただいた多くの方々にまずは感謝申し上げます。本校には高校の先生以外にも、100人を越す地域の先生方がいます。この多様な研究活動や系列活動の事業の中で、生徒たちをご指導いただき、また、協働して成功体験をくださった地域の先生方に改めて感謝申し上げます。

さて、学校での学びについて少し考えたいと思います。学校での勉強とは、聞き、読んでインプットした知識を使って問いを解き、正解と一致させること。その正答率を得点化し競い、大学や会社の試験に合格する。そのようなイメージを描いている方も多いのではないのでしょうか。豊富な知識は判断したり、思考したり、表現したりするためにはなくてはならないツールですし、持てる知識量は努力の証でもあり、知識がなくては創造することはできません。ノートに何度も書き、単語帳で繰り返し、語呂合わせで記憶する。このようなドリル形式の努力はどんな仕事においても必要で、知識や経験による根拠や裏付けなく実行する行動や事業は成功率が下がります。

その上で、本校ではそれまで学んだ知識や経験を基盤に、それらを繋ぎ、様々な方々と協働して、この報告書のような課題研究活動が行われていることが大きな特長です。本年度も文化理解・地域環境・酪農食品、三つの系列の15のゼミ班それぞれが課題と目標を設定し、その解決に向けてPDCAのサイクルで活動を続けてきました。今年はコロナウィルス感染症拡大の影響で、実質的な活動は6月からとなり、人との交流も制限される中、当初の計画を変更し、ICTを活用したり新しい協働者を発掘する等、随所に柔軟な変更と判断を要する一年となりました。まさしく、マニュアルや計画通りにできない中で研究を進める方法について工夫しながら行動しなくてはならない手探りの一年だったと思います。しかし、手探りであることが探究の基本と考えます。答えを導き出す方法を与えられることなく、生徒の皆さんがゼミのメンバーと知恵を出し合い、答えのない課題に向かって探究を続ける。そのような意味では、今年は活動量こそ減ってしまったとはいえ、探究の質としては貴重な経験ができたのではないかと思います。当初の予定通りの成果が得られず、自己評価の低いゼミ班もありましたが、それは制限によって実質的な成果が足りなかったためであって、うまくいかないことに関して考え、話し合ってきた経験は例年にないものとして、高く評価して良いと思います。

年度末に実施された今年の校内での総合学科研究発表会と実績発表大会では、各班の研究発表を映像、文字、掲示物、対話、声等の様々な表現方法によって生で感じることができました。また、毎日のように学校ではゼミ班の積極的な活動と出会うことができました。学びの場は教室だけでなく、自分を啓けばあらゆるところにあるのだと気づかされます。この収録を手にとられた方々には、このような生徒たちの思いと行動力も感じながらお読みいただければと思います。

最後に、今年、全てのゼミ班の発表資料をご覧いただき、講演もいただいた建築家の隈研吾先生からのメッセージを確認して、巻頭言とします。

「創る力」～ 時代の転換点、新しい時代の先導者に!